航空機拘束制動装置の定期認証試験

Annual Aircraft Arresting System certification

May 4, 2020

374th Airlift Wing Public Affairs

(Photos by Machiko Arita)

太平洋と同じくらい広い管轄区域、かつ世界的に感染症が流行する中で、米軍が地域の安全を維持する使命を果たすために同盟国と共同運用できる飛行場を確保するには、チームの努力が必要だ。

三沢基地第３５運用群と第３５整備群の「太平洋空軍F−１６ファイティングファルコン・デモンストレーションチーム」と横田基地第３７４運用群と第３７４施設中隊はこのほど連携し、コロナ禍の数々の課題を乗り越えた。４月２９日、三沢基地と横田基地のメンバーは、年一度行われている横田飛行場の航空機拘束制動装置のバリア・アレスティング・キットBAK−１２の認証を更新する試験を行うために集った。

「BAK−１２装置の認証を更新することで、横田飛行場は非常時の運用の際に戦闘機を受け入れられるようになる。戦闘機が安全に使用できるよう認証を得ると、この地域内の運用上の制約の多くを排除し、さらに管轄地域において米海軍や航空自衛隊の戦闘機を支援する能力を高め、空軍力の可能性を広げる」と第３７４運用支援中隊飛行場運用小隊長ケイト・エピノ―サ大尉は述べた。

毎年の認定試験では、ケーブルを捕捉する格納式のテールフックを使用して、緊急着陸時や離陸中止時に航空機を安全に減速させるブレーキシステムとして機能するBAK−１２の安定性をテストする。三沢基地から横田に要員を送るにあたっては、特別な調整なくして、この認証試験は実現し得なかった。

「（新型コロナウィルス感染症対策で）行動制限下にあるため、航空機拘束制動装置のテスト時に必要な航空機の整備に欠かせない三沢のサポート要員は、通常の手順では横田に来ることはできなかった。しかし、第４５９空輸中隊C−１２ヒューロンのチームメイトの協力も得て、あらゆる医学的予防措置をとりながら感染リスクを軽減し、認証のプロセスを遅らせず、認証試験に必要な空兵たちを安全に送ることができた」とエピノ―サ大尉は述べた。

この必要な試験の実施を可能にしたのは、隊員たちの空軍チームへの献身そのものであり、全ての関連組織の柔軟性、能力、そして意欲の証だ。

「現在の新型コロナの状況下ではさまざまな制限がありうるが、それでも任務は中断できない。テストを行う航空機の支援のために我々は横田に来たが、今回は我々の訓練にもなった。さらに、これによって緊急着陸場所としての認証を受け、横田が全ての航空機を支援するインド太平洋軍の任務を担い、将来の運用に備え機敏な戦力展開の即応力が強化される」と第３５航空機整備中隊運用官ケイス・ディアリング大尉は述べ、「F−１６のパイロットが新しい飛行場や環境で経験を積むのと同じように、整備士も同じように経験を積んでいく。所属基地から外に出ると、新たな環境下で航空機のニーズに対応する力が求められる」と付け加えた。

三沢基地の空兵の協力により、横田飛行場は改めて航空機拘束制動装置の認証に合格した。横田飛行場はこの先また一年、即応する準備が整っている。